



図書館だより

2018.4
No. 29

長崎県立大学佐世保校附属図書館

〒858-8580 佐世保市川下町123
TEL 0956-47-5958
<http://sun.ac.jp/center/lib/sasebo/>

世界は変化する

太田博道

(学長)

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。皆さんはこれから4年間、長崎県立大学で学び、社会人として活躍するための準備をします。人生を生きていくための学修や勉強は4年間で事足りる訳ではありませんが、これからの4年間ほど学修に集中できる期間は、一生というスケールで考えても無いでしょうから、貴重な機会を無為に過ごすことのないようにして下さい。

私は新入生の皆さんの4倍くらい生きて来ましたが、物心ついた頃と現在を比べると世の中は本当に変わったな、と実感します。皆さんが生きていく時代の変化は、もっと早いでしょう。もう少し正確に言えば「変わる」のではなく、皆さんが「変える」主役になり得るということです。変化する社会についていくために学修するのではなく、変える力を獲得するために学修するのです。

「変化」について、いくつかわかりやすい例を挙げてみます。私の家に電話が入ったのは、私が中学生か高校生の時(1950年代後半)でした。特別経済的に困窮していたわけではなく、そんなものだったのです。学生時代の「下宿生活」(下宿って何のことか分かりますか?)でも、就職した会社の独身寮でも、部屋に電話はありませんでした。移動する電話というものを初めてみたのは、大学の教員になってしばらくしてからで、80年代の後半

です。ある大企業の役員方の車に付いていました。とてもポケットに入れて持ち運べる代物ではありませんでした。

初めて電動タイプライター(タイプライターも分からないかもしれませんね)を使った時の感激は忘れることができません。これは大学院を修了してある研究所に勤務していた頃ですから、70年代の後半でしょうか。それまでは書いた文章の単語ひとつ間違っていたら、1ページまるまる打ち直しだったのが、タイプライターに文章を記憶させて、間違っただけ訂正すれば、あとは全部自動で論文が書けるようになったのです。こんな便利な機械がその後すぐ登場したワードプロセッサ、パーソナルコンピュータにとって代わられました。

初めて海外旅行をしたのは70年代の半ば頃かと思いますが、この時代にはカードはありませんでした。現金を持ち歩くリスクを回避する手段として「トラベラーズチェック」というものがありました。サインをするところが2箇所あり、1箇所には予めサインしておきます。支払いをするときにもう1箇所にサインして現金の代わりに使うのです。サインが違えば盗品ということになるので、現金よりは安全でした。クレジットカードを持つようになったのは89年の海外出張の時からです。

それなりの準備がいるにしても、皆さんは今、これらの全てをスマホだけでできるようになっています。飛行機のチケットにもなるし、カメラも時計もいらぬ。そして今後さらに早く様々なことが変化するでしょう。こ

のような世界に主体的に関わるために学修するのです。しかも、未来のことですから、何がどう変わるか予想できません。人口が減っていくことを考えれば、好むと好まざるとに関わらず、外国人とのお付き合いもこれまで以上に多くなるでしょう。人工知能というある意味では厄介なものもどんどん発達しています。使い方次第で皆さんの協力者にもなるしライバルにもなり得ます。

このようなダイナミックな時代を生きる、あるいは創るためには、何があってもたじろ

がず、様々な観点からよく考え、的確な判断ができなければなりません。判断のための材料が多ければ多い程良いことは間違いありません。全てを講義と自身の体験で学修することは不可能なので、歴史に学び、先人に教えを乞い、行かずして世界の見聞を広めることができれば最高です。いくら便利でもスマホだけでこれらのこと全てができる訳ではありません。では、どうすれば良いか？答えは簡単です。せつかく身近にある図書館を活用しない手はありません。



図書館を使い倒そう —大学の学び

石田 和彦

(附属図書館長)

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。皆さんは、それぞれ、いろいろな期待や希望を抱いて本学に入学して来たものと思います。この『図書館だより』は、皆さんに附属図書館を活用して頂くための一種のPR誌です。今回は、図書館利用の前提として、「大学で学ぶ」ということの意義について書きたいと思います。2～4年生の在学生の皆さんにも、もう一度自分たちの学びの意義を考え直すきっかけとなればと思います。

大袈裟な言い方かも知れませんが、「大学で学ぶ」、あるいは、そもそも「学問をする」ということは、物事の「原理」や「真理」を探究することです。例えば、経済や、それを構成する企業・個人等は、どんな原理に従ってどのように動き、その結果どのような事態が生ずるのか、その仕組みを本質に遡って理解することが、本当の意味で学ぶことだと思います。冒頭の学長のご寄稿にもあるように、変化の激しい世の中です。表面的な知識の羅

列をいくらたくさん頭に入れても、その多くは、急速に陳腐化して行きます。経済や社会の表面に顕れる様々な現象の根底にある「原理」や「真理」をきちんと理解しなくては、大学で学んだ意義は半減してしまうでしょう。

しかし、実は、ここに大きな問題があります。多数の企業や個人が参加する経済・社会においては、複雑に絡まり合った非常に多くの要因が、表面で観察される現象やその最終的な帰結に影響を与えるため、何が根底にある「原理」や「真理」であるのか、わからないことがしばしば起こります。そこから、いろいろな「学説」や、意見・見解、それらの間の対立が生まれ、テストのような「唯一の正解」がない場合も多々あります。

皆さんが、講義や演習で教えられること、あるいは教科書で読むことも、もしかしたら、そうした学説の1つであって、異なる学説や見解が存在しているかも知れません。この『図書館だより』にも、毎回多くの先生方が寄稿して下さいます。それらは、各先生が「真理」と考えておられることや、あるいは、「真理」が書かれているとして薦められる書物であったりしますが、実は、それとは異なる見解や、違う立場から書かれた書物もあるかも知れないのです。皆さんは、そうした可能性

をいつも頭に置きながら、幅広く学び、最終的には、自分の頭で考えて、自分は何が「真理」だと考えるのかを判断できる力を身につけなければなりません。

そのための1つの方法は、本や文献をたくさん読むことです。講義や演習で、教科書や参考書として挙げられた本があったら、それらをしっかり読むと同時に、違う立場から書かれた本も探して読んでみて下さい。この『図書館だより』で先生方が薦めている本も、興味を持ったら、まずは読んでみるのですが、次の段階は、異なる立場から書かれた本はないか探し、それらも併せて読んで、自分なりに考えてみることです。社会人に比べれば時間に大きなゆとりのある学生時代です。なるべく幅広く本や文献を読んで、自分の頭で考える習慣をつけて下さい。では、たくさん本や文献を読むための費用や、異なる立場から書かれた本等を探す手間はどうか？そのために附属図書館があります。図書館を徹底的に活用すれば、費用を掛けず、検索の手間も最小化して、多くの本・文献を読むことが出来るはずで、図書館では、そのためのガイダンス等も開催していますので、是非、有効に「使い倒して」下さい。

もう1つの大事な方法は、他人と議論することです。同じ本を読んでも、違う理解をしたり、異なる見解を持つようになる友人がいるかも知れません。友人は、同じテーマについて、自分が読んだものとは異なる立場から

書かれた本等を読んでいることもしばしばあります。そうした友人・仲間と議論することは、自分の考えを深め、時には、自分の誤りや理解の不十分さを気づかせてくれます。お互いが、背後に会社とか組織とかの利害を背負わずに、自由な立場から議論することのできる学生時代は、本当に貴重です。ここで、自由な議論の経験を多く積み重ねておくことが、将来、自分の頭で考えて判断することに大いに役立つものと思います。昔の大学では、こうした議論の場は、大学周辺の喫茶店や居酒屋等に委ねられ、大学図書館はあくまでも静かに本を読む場所でしたが、今は、こうした場の提供も、大学図書館の大事な機能になっています。本学でも、今年度から、こうした場として、附属図書館の1Fに「ラーニングコモンズ」を設置しました。効率的に議論を行うために役立つ道具も揃えていますので、この面でも、図書館をとことん「使い倒して」頂ければと思います。



『法哲学入門』が 座右の書

板垣 太郎

(経営学科講師)

この度、再度『図書館だより』の執筆をす

ることになりました。前回執筆したときから間もないこともあり、どのようなテーマで書こうか悩みましたが、前は私が法学の「入門書」を読んだときの出来事をテーマとしていましたので、今回はこれまで私が読んだ中でとくに感銘を受けた本についてお話したいと思います。

前回の内容では、私が大学院に進学する直前に図書館でいろいろな本を読んだことについて触れていますが、このとき読んだ本の中には、哲学に関するもの、論理学に関するものが多く含まれています。学生の皆さんも、新入生のころから「論理的思考」が大事だと先生方から教えられていると思いますが、そもそも「論理的」とはいかなることなのか、当時の私はそうしたことも改めて勉強したいと考えていました。また、大学在学中に「論理学」を履修しなかったこと、もともと高校のころから哲学に強い興味を持っていたことから、専攻する分野とは別に、哲学的、論理的な関心を持ち続けていました。

そのようなこともあり、大学院進学後は、通常は専攻する分野（私の場合は民法や商法などの民事法学）に関連した科目を履修するところ、それとは別に、「法哲学」の科目など、いわゆる「基礎法学」に関する科目も積極的に履修しました。ところが、「法哲学」の講義で、偶然にも私のテーマに直接関係する問題にぶつかるという出来事がありました。当時法哲学の講座を担当されていたのは長尾龍一先生という方で、20世紀を代表する法学者であるハンス・ケルゼンに関する研究の第一人者でもある方でした（ケルゼンについては同先生が訳された『ハンス・ケルゼン自伝』において詳しく紹介されています）。先の出来事は、講義中の雑談で「意思表示」の概念に対する批判的検討を先生が紹介されたときのことでした。講義後にその内容について質問したところ、先生から「ケルゼンのWillensdogma 批判」というご自身の論文の抜き刷りをいただき、しばらくは夢中でドイツ語の原典も参照しながらその内容を検討していました。

この出来事以来、私はすっかり長尾先生のファンになりましたが、法哲学の講義を受講

してからしばらくして、講談社学術文庫に、長尾先生が過去に発表された『法哲学入門』が加わったことを知りました。早速購入して読んだところ、この本は前回の図書館だよりで私がお話したような「入門書」とはかなり違うものであることがすぐにわかりました。同書のはしがきにもありますが、この本は法哲学の講義で使われる教科書のようなものではなく、法哲学におけるさまざまな、しかも古典的な問題を門外の人々に示すというものです。

この法哲学入門を手に入れて以来、この本は私の「座右の書」となりました。先に述べたように、この本を読んでも法哲学の体系のようなものがわかるわけではありません。しかし、法学的あるいは哲学的にも重要かつ根本的な問題は、むしろ身近なことに多く存在していると言えます。たとえば、昔は一家に一台しかテレビがないということが当たり前でした。そのため、誰がどのチャンネルを視聴するかというチャンネル争いが起きたとき、それをどのように解決するか家族間でルールが必要になります。このとき、いかなる要素が考慮されるか。年功序列によるのでしょうか、番組の内容が教育的などの理由で決まるのでしょうか。「根本的な問題」はこのような中にも見つけることができます。この本ではそうした例をたくさん取り上げつつ、それらに関する法哲学上のさまざまな考え方を紹介しています。

もちろん、学問的に意義のあるものだとしても、本として面白いかは別の問題ですが、長尾先生ならではの整然としながらもユーモアに富んだ文章に、そうした心配は無用です。法哲学を学ぼう！とかたく考える必要はありません。面白い本が読みたいという人にぜひお勧めしたい一冊です。

吉野 源三郎 著
『君たちはどう生きるか』
をめぐって

山 本 裕

(国際経営学科教授)

図書館から、3回目となる図書館だよりの執筆をお願いされましたが、2月に依頼され締め切りまでひと半月ほどしかありませんでした。このような言い訳を並べながら、今回は所属学科が入学前教育の課題図書として出した「君たちはどう生きるか」に対する筆者の講評を紹介して図書館だよりとすることをお許しください。したがって読者の対象は学生を前提としています。ここには「講評」を一部手直ししたものを再掲します。筆者は本学に赴任した7年前から、おもに2年生のゼミで「君たちは」を学生と一緒に読んできました。そんな硬派の本が近年ではブームとなり、漫画本は200万部を突破したと聞いて驚いています。

読書をするときは、時代背景を思い浮かべ、さらに、筆者がどのような視点から書いているかを探りながら読み進める必要があります。「君たちは」は昭和10年代の東京の山の手、小石川（今の文京区）が主な舞台です。昭和10年代は、第一次大戦と第二次大戦との戦間期であり、日本政治史では昭和5年（1930年）からを15年戦争ともいいます。ドイツのナチズム、イタリアのファシズムとともに天皇制ファシズムとして、日本が全体主義に陥った暗い時期でもありました。戦後、日本は立憲君主制のもと、広く民主主義が定着しましたが、当時は国民の生活の厳しさと相まって、次第に出版の自由や発言にも圧力がかかる時代に入っていきます。本文には直接戦争や政治のことは語られていませんが、行間



からそのようなことが多く感じられるはずで

す。次に本書の筆者の視点ですが、物事を大きな視点と細かい視点とをうまく使い分けながら見えています。鳥の目と虫の目と表現されることもあります。また、皆さんが全学教養で学ぶ社会学などで、経済的な下部構造で物事をとらえるマルクスの視点と、文化や宗教など（上部構造）でとらえるウェーバー的な視点の違いについても勉強します。フロイトの心理学的な分析方法を社会分析に応用した捉え方も学ぶはずで、本文にある「人間分子の関係、網の目の法則」は粉ミルクの生産から消費までの関係をコペル君が帰納（抽象化）した面白い例えで、生産関係の概念とおなじ発想で考えられています。

これまでも中学や高校で日本の産業については、資源に乏しいゆえに加工貿易からはじまった輸出立国だと勉強してきましたね。大学では、さらに詳しく生産のための原材料の輸入（調達物流）、製造に関する物流、最後に販売に関する物流とサプライチェーンについても学びます。サプライチェーンは製造にかかわるすべてのステークホルダーの最適化と定義されています。大学では生産に関わらず経済活動を単体で理解するのではなく、その前後の繋がりを重視した大きな流れの中で

とらえることができるようなカリキュラム構成となっています。例えば、国際経営学科では経営学や流通に関する概論を学んだあと、国際経済論や国際物流論、金融論などを学んでいけば、グローバルなビジネスのしくみと理論が分かってきます。

ちなみに、本文に出てくるオーストラリアの酪農家による粉ミルクの生産、トラックでの出荷、鉄道で港までの輸送、港から日本までの船積みについては、現在ではコンテナ輸送に変わっており、このように複数の輸送モードを使った国際物流をインターモダル（複合一貫輸送）、牛乳や生鮮類など冷凍・冷蔵が必要とされる輸送管理方法をコールド・チェーンとよび国際物流論で詳しく学びます。

最後に丸山真男は岩波文庫版の回想の中で「君たちは」は人生読本であり、モラルと切り離せない社会科学的認識論を示した特長をもち、さらに現代の「古典」ともよんでいます。古典とはその時代についての深い考察や認識だけではなく、どの時代にも当てはまる普遍

性をもつものです。次に「君たちは」を読み返す機会があれば、それぞれの章を現在に置き換えて、文章と対話しながら読み進んで下さい。最初に読んだ時とは違った発見があるはずです。

丸山真男の読書案内は次の機会に譲ることとします。「超国家主義の論理と心理」などの多くの論文や研究書を残し、戦後最大の知識人と位置付けられる丸山の著書も一緒に読んでみましょう。以前は単行本や高価な全集に収められていた文章が、現在では手軽に文庫本で読める時代となりました。

大学では多くの課外講座も用意されていますが、思考を深める手段は読書や少人数での議論、論文の作成しかないと思います。その中でも、読書は最も身近な存在です。大学の4年間でしっかり教養を積んで、読書を通して思考力を深めることが出来た学生は、社会人になっても大きな飛躍が約束されます。それでは皆さんとゼミや講義でお会いできることを楽しみにしています！

ななめ読みしたい一冊

フィル・ナイト著（大田黒奉之訳）
『SHOE DOG』（シュードッグ）

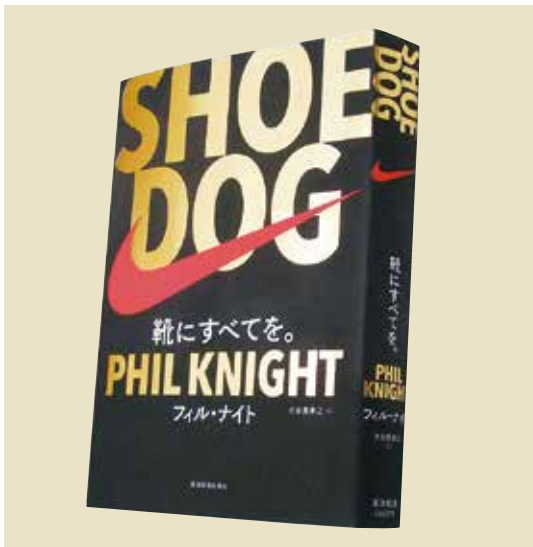
菅 宜 紀

（実践経済学科教授）

最近、埼玉の行田の老舗足袋屋さんが、地下足袋式のランニングシューズを制作して事業の起死回生を図るというテレビ番組が高視聴率を取って、それにあやかって出版されたのではないでしょうが、この『SHOEDOG』（シュードッグ）という本、翻訳物にしては読みやすく、今年の授業をどうしようかと日夜気に病む私にとっては清涼剤になりました。

簡単に説明すると、フィル・ナイトという

スタンフォード MBA 取得の元中距離ランナーが世界旅行に旅立ち、途中立ち寄った日本で、前から注目していたシューズメーカーのオニツカと交渉して、わずか50ドルの前払金でアメリカでの輸入販売権を得て起業する。ところが事業が好調になると、直接販売を狙うオニツカは契約を打ち切ってしまう。この暗転をまたもや日本企業の日商岩井の支援で乗り切り、独自ブランドのナイキを誕生させて、アディダスやプーマを凌ぐ世界最大のスポーツ用品メーカーに成長させていくという成功譚です。もちろん編年式の社史とは違って、恩師の大学陸上コーチで草創期の共同経営者パウワーマン、学生時代のアスリート仲間、正社員1号のジョンソン、オニツカ社員のキタミ、日商岩井のスメラギ等、個性



豊かな登場人物が話を彩り、彼らに対するナイトの愛情が伝わってきます。

一種の青春小説的なところもありますが、日本企業といえば不正検査やデータ改ざんなど、どちらかと言えば暗いニュースが先に立つ今とは違って、世界から日本の技術が注目されていた時代、日本企業が世界相手に信義に厚い商売をしていた時代が舞台になっているのも、われわれが心地よく読める理由の一つだと思います。

この本の唯一の悪役とも言えるのは、オニツカ、のちのアシックス創業者の鬼塚喜八郎氏です。もしやと思い日経のデータベースを検索すると、1990年7月に鬼塚氏が「私の履歴書」を寄稿しており、「東京五輪の一年前に、フィリップ・ナイトという青年が訪ねてきて、オニツカシューズをぜひ扱わせてほしいと言ってきた。裸一貫で事業を始めたいという彼の心意気を感じて販売店をやらせてみることにした。」「苦勞が実って成功したが、7年後もっと拡販してもらおうと販売会社設立の計画を進めていたところ、日本の商社の勧誘で他のメーカーからの仕入れに切り替えた。ドライな行動に裏切られた。」という記述がありました。どちらが真実に近いの

かはわかりませんが、実はこの鬼塚氏の私の履歴書自体も興味深いものでした。酢の物のタコの吸盤から思いついたバスケットシューズの靴底、裸足が一番と言うアベベの足を触らせてもらい特注のマラソンシューズを試作して履いてもらうことに成功するなど、ドラマ性ではこのシュードッグや「陸王」にも引けを取りません。

昨年度後期、「ビジネス経済の実践」という講義で柳田先生のお手伝いをさせていただき、現役の経営者の方々のお話を伺いました。創業者もいれば、2代目、3代目の社長さんもおられましたが、一見温かな中にも同業他社に対する競争意識が垣間見えたり、地域や社会の環境変化に注目し（下世話な言葉ですが）商売のネタはないかと目配りを絶やさなかったり、確かに経営者の行動や思考は並みのサラリーマンとは違っていました。

国家公務員を多数輩出することで有名な某大学でも、近年は公務員就職率が下がり、新興IT企業への就職や起業する卒業生が増えているとのこと。差し迫って就職活動中の方々はそちらに集中していただくとして、まだ時間的に余裕のある皆さんは本書でもななめ読みして、「もし私が起業するとしたら、どの業界がいいかな。」などと、まずは空想から始めてみてはいかがでしょうか。

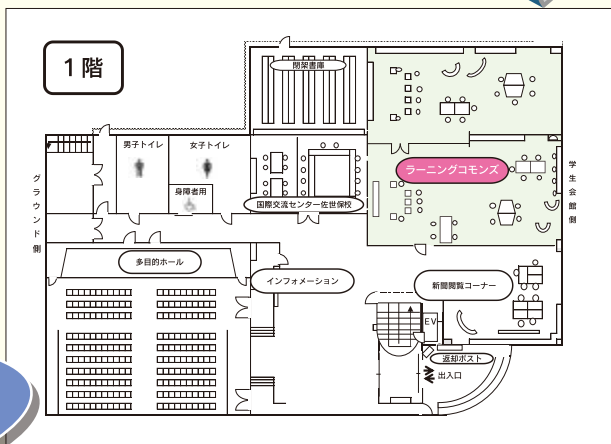


図書館が変わります! 学生が変わります!



本学のキャンパス整備に伴い、自学や、グループ学習（修）、プレゼンテーションの練習など学生の主体的な学びの場としてラーニングコモンズが整備される予定ですが、現学生への対応と図書館の情報資源をより活用するため、今回、先行的に図書館内にラーニングコモンズを整備しました。

4月3日に
オープニングセレモニーを行い、
供用開始しました。



整備内容

- ①活動状況が見えるガラス間仕切り
- ②可動式のテーブルと椅子 約50人利用可
- ③立ち話ができる昇降式テーブルと椅子
- ④電子黒板2台、モニター3台、パソコン6台 など

◆附属図書館HPアドレス <http://sun.ac.jp/center/lib/sasebo/>

- 当館は本学学生以外の方でも県内にお住まいの15歳以上の方は利用できます。
- 開館時間／平 日：午前8時30分～午後10時まで（学生の休業期間中は午前9時～午後5時まで）
土曜日：午前9時～午後5時まで
休館日：日曜日・祝祭日・大学閉校日など

編集・発行責任／長崎県立大学佐世保校附属図書館運営委員会 発行日／2018年4月27日